VOL. 101

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

千葉市美術館ニュース　「C'n」(シーン)　101号

［編集・発行］千葉市美術館　〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8　TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art　3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan　https://www.ccma-net.jp/
［発行日］2021年12月24日
［印刷］株式会社 エイチケイ グラフィックス

C'n scene news

ccma_jp
ccma_jp
CHIBA CITY 100

左：鈴木春信　《夜の梅》　1766年頃
　　メトロポリタン美術館蔵
右：アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック
　　《ディヴァン・ジャポネ》　1893年
　　ジマーリ美術館蔵

館長のつれづれコレクション案内

稲毛に住んだフランス人画家ジョルジュ・ビゴー

ジョルジュ・ビゴー
《稲毛・五月の節句》
カンヴァス・油彩　制作年不詳　45.0×39.0cm
千葉市美術館蔵

浮世絵の始祖とされる菱川師宣が房州出身であった縁で、千葉市美術館は浮世絵を収集の柱のひとつとしています。よく知られているように、19世紀後半、特に1862年のロンドン万博に日本使節団が送られて以降、ヨーロッパで日本趣味が流行し、中でも浮世絵が多くの画家や美術関係者を魅了しました。ゴンクール兄弟の小説『マネット・サロモン』(1867年)の、浮世絵の画帳についての次の描写は読者たちを日本への憧れに誘ったといいます。

「*画帳の表紙は色とりどりに彩色され、押し型で型付けされ、金粉が塗され、絹の糸で綴じられており、各々の頁は鮮やかな緋色、ウルトラマリン、エメラルドグリーンに染められ、飾り立てられ、煌めき、東洋風の色彩ちりばむ象牙製のパレットを思わせた。夢のように美しい国の日差し、影のない、光だけからなる日なたが、これらの浮世絵画帳から立ち上ってくる。見つめていると、薄黄色の空に深く入り込んだ気がしてきて、そのまぶしい陽光は人影や山野を包み込んでいる。木々に咲く桃色の花々の背景なす青空、桃や扁桃の雪のように真っ白い花々をはめ込んだ七宝を思わせるこの青色、日差しまで紅の真っ赤な夕日、渡りゆく鶴の影がよぎる壮麗な落日に我を忘れた。*」(註)

西洋絵画のように陰影を描かない色鮮やかな浮世絵から、光と色彩にあふれる国として日本がイメージされていたことがわかります。日本はまた自然と調和した生活があり、花にあふれ、子供たちが大切にされている国としても知られていました。

1882年に来日したフランス人画家ジョルジュ・ビゴー（1860-1927）もそうした日本への憧れを抱き、日本の絵画技法を学ぶ希望を持っていたといいます。母が画家であったことも影響してか、幼くしてジャン・レオン・ジェローム（1824-1904）、カロリュス・デュラン（1837-1917）といったサロンの画家たちに師事し、フェリックス・ビュオ（1847-98）に銅版画を学びました。日本ではフランス語教師などで生計を立てつつ、石版画集『アサ』(1883年)、銅版画集『オハヨ』(1883年)、『トバエ』(1884年)など、明治期の日本の生活を活写したカリカチュアを刊行。それらは日本がほとんど盲目的に西洋化していくことを茶化しています。そうした体制批判的な作品を公にできたのは、1858年に江戸幕府が欧米五か国と締結した条約により居留地が治外法権になっていたからでした。条約改正により1899年に外国人居留地が廃止されることが決まると、それまでのような制作が難しくなることを恐れたビゴーは20世紀の幕開けを半年後に控えた夏、フランスに帰国します。

欧化と都市化が進んでいく東京に疲れたのか、ビゴーは、帰国するまでの3年ほど、千葉の稲毛海岸にアトリエを構え、日本人の妻マスと長男モーリスとともに暮らしていました。その家は海水浴と保養に訪れる人々のための旅館海気館の隣にあったといいます。『稲毛・五月の節句』の画面右下には「g.Bigot」のサインが、カンヴァス木枠には「Inague」と鉛筆で書き込みがあります。前景に描かれた2本の木の向こうに見える色鮮やかな鯉のぼりと青空が印象的な一点です。日本古来の風習への愛着と子の健やかな成長を願う気持ちが感じられます。

［館長　山梨絵美子］

(註) 山本武男「エドモン・ド・ゴンクールの『十八世紀日本美術』に関する未刊ノートに就いて」(『慶応大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』No.50　慶応大学日吉紀要刊行委員会　2018年)より引用

Ukiyo-e Viewed through JAPONISME

ジャポニスム 世界を魅了した浮世絵

「ジャポニスム—世界を魅了した浮世絵」担当学芸員インタビュー

新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年7月から延期となっていた「ジャポニスム—世界を魅了した浮世絵」が、ついに開催となります。楽しみにされていたみなさん、お待たせいたしました！　展覧会開催までの経緯や見どころを、担当学芸員に聞きました。

【図1】ニコライ・ニコラエビッチ・ゼデラー《芸術と批評》1906年 プーシキン美術館蔵

【図2】アンナ・ペトロヴナ・オストロウモヴァ=レベデヴァ《鉄柵と木》1900年 プーシキン美術館蔵

【図3】モーリス・ドニ《海の前の母性》1900年 ジマーリ美術館蔵

——ついに1月から開催となりますが、展覧会の構想はいつごろからあったのでしょうか。

「初期浮世絵展」（2016年）が終わったころですね。つぎはこういうものをやりたいな、と考えていました。ジャポニスムを扱った展覧会の多くは、西洋美術史の研究者が中心となって企画されています。それはそれでもちろんいいのですが、浮世絵を研究している自分がジャポニスム作品を見たらどうなるのだろうか、と思ったのがきっかけです。浮世絵が影響したジャポニスム作品を通して、その魅力と特性を伝える展覧会を作りたい、と思うようになりました。

——ジャポニスムにまつわる展覧会は、さまざまなところで開催されていますが、浮世絵に主軸を置いた展示はほとんどないようですね。

そうですね。日本美術や浮世絵を讃える語り口であっても、やはり西洋画のほうに重きが置かれるので、浮世絵研究者としては、浮世絵の魅力も同時に伝えられたらな、という想いもありました。

——今回は、海外からの出品作が多数あります。どのような作品がやってくるのでしょうか。

まず、メトロポリタン美術館とホノルル美術館から、浮世絵の名品をお借りしています。ジャポニスム作品については、アメリカ・ニュージャージー州にあるジマーリ美術館と、ロシアのプーシキン美術館からお借りしました。ジマーリ美術館は、1766年に創設されたラトガーズ大学にある美術館で、おもに版画から成るジャポニスム作品のコレクションを持っています。そのなかから、ジャポニスムの歴史を語るものや、浮世絵的な表現を感じるものを選びました。プーシキン美術館は、じつはほかの調査のついでに作品を見せてもらったのですが、これがなかなかおもしろく……。

ジャポニスム—世界を魅了した浮世絵
会　期　2022年1月12日［水］～ 3月6日［日］
会　場　8･7階 企画展示室
休館日　2月7日（月）
詳細はホームページよりご覧ください

——いわゆる印象派におけるジャポニスムを想定していると、とても新鮮に感じる作品たちですね。

フランス中心のジャポニスムでは、本格的に木版画を手がけた画家は、あまり多くありません。一方、ロシアのジャポニスム作品では、木版画への強いこだわりを感じました【図1】。たとえばオストロウモヴァ＝レベデヴァは、ロシアの美術学校ではじめて、木版画を卒業制作とした人物なのだそうです【図2】。フランス中心のジャポニスムの切り口はすでにいくつもあるので、ロシアやアメリカといった、ヨーロッパ以外のジャポニスム作品も積極的に紹介したいと思っています。

作品をセレクトする際は、版画、とくに木版画にこだわって行いました。とある人からは、変わった作品を選んでいるね、と言われたのですが（笑）、これまでのジャポニスム研究では気づかれていなかったであろう部分も、浮世絵を得意としてきた美術館の目線から取り上げています。

——国内の美術館からも浮世絵の名品が集まっています。これらの作品群がどんな構成で見られるのか、とても楽しみです。

呼応する作品を並べて見せる部分もありますが、基本的には、描かれた主題や、構図や色などの表現方法に着目してご紹介します。たとえば、浮世絵ならではの「黒」の豊かさを語るために、ジャポニスム作品を引き合いに出したり、浮世絵における平和的な題材の多さを伝えるために、母と子をモチーフにしたジャポニスム作品を紹介したりしています【図3】。あくまでスポットライトを当てるのは浮世絵で、浮世絵の多様な表現を、見て、感じて、理解していく展示になると思います。

もともとは、「ジャポニスムを通して浮世絵を視る」という展覧会タイトルをつけていたんです。これでは集客が望めない、ということで変更しましたが（笑）、英語のタイトルはそのまま“Ukiyo-e Viewed through Japonisme”としています。

——浮世絵の専門家である田辺さんから見て、ジャポニスム作品のおもしろさはどういったところにあると感じますか。

木版画にこだわった西洋の画家たちは、おもしろいと思いますね。多色摺の工程をひとりでやらなければならないので、多くの画家が難しさを感じて諦めていったようですが、目指していたのは浮世絵的な表現でした。

また、浮世絵師は、頭のなかで想像した視点で俯瞰の構図を描きます【図4】。これも、西洋の画家に影響を与えたのですが、どうやらこういった構図は、西洋人にとっては、実際に上から見ることからスタートしないと描き難いようなんですね。フランスの画家アンリ・リヴィエールは、実際にエッフェル塔に登って、俯瞰した景色を写真に撮って、描いたんだそうです【図5】。ジャポニスム作品から跳ね返って、浮世絵との違いやおもしろさを再確認することも多かったです。

——最後に、展覧会の見どころをお聞かせください。

点数としては約220点、作家としては約70名の作品を、一挙に公開する展示となります。ジャポニスム作品においては、版画にこだわってセレクトし、ヨーロッパだけでなく、ロシアやアメリカの作品もご紹介します。これまでのジャポニスムを扱った展示とは違った切り口を通して、浮世絵の魅力を楽しんでもらいたいと思っています。

〔話し手：副館長兼学芸課長　田辺昌子〕

【図4】歌川広重《名所江戸百景 深川洲崎十万坪》1857年 個人蔵

【図5】アンリ・リヴィエール《オートゥイユ高架橋より—『エッフェル塔三十六景』のための習作》1891年 ジマーリ美術館蔵

2021年10月16日〜12月26日　「つくりかけラボ05　松本力｜SF　とりはうたう　ひみつを」レポート

宇宙巣箱のSFラジオ局より、SFなはなしをお届けします。

［撮影：須崎隆善］

「SF とりはうたう ひみつを」では、みなさんが体験した「SFなはなし」を募集しています。集まった「SFなはなし」は、会場に掲示され、好きなものを読み上げて録音することもできます。今回は、作家の松本力さんに「宇宙巣箱のSFラジオ局」についてお聞きするとともに、集まった「SFなはなし」の一部をご紹介します。

——なぜ「ラジオ局」を作ろうと思ったのでしょうか。

鳥は、場所を転々と変えて生きていくので、住み着くことを想定した巣箱は、人間にとっての「居場所」を投影しているものだと思うんです。そこで、人間サイズの巣箱とはなんだろうと考え、この「宇宙巣箱」を作りました。

そのなかで、間接的なコミュニケーションが生まれると良いなと思い、「SFなはなし」を募集することにしました。そして、自分ではなく、どこかのだれかが目の当たりにしたことを代読する。その行為が、ラジオDJのようだと思ったので、ラジオ局にすることにしました。

4〜5年くらい前に動物園にいったら犬とライオンがいっしょにいた。

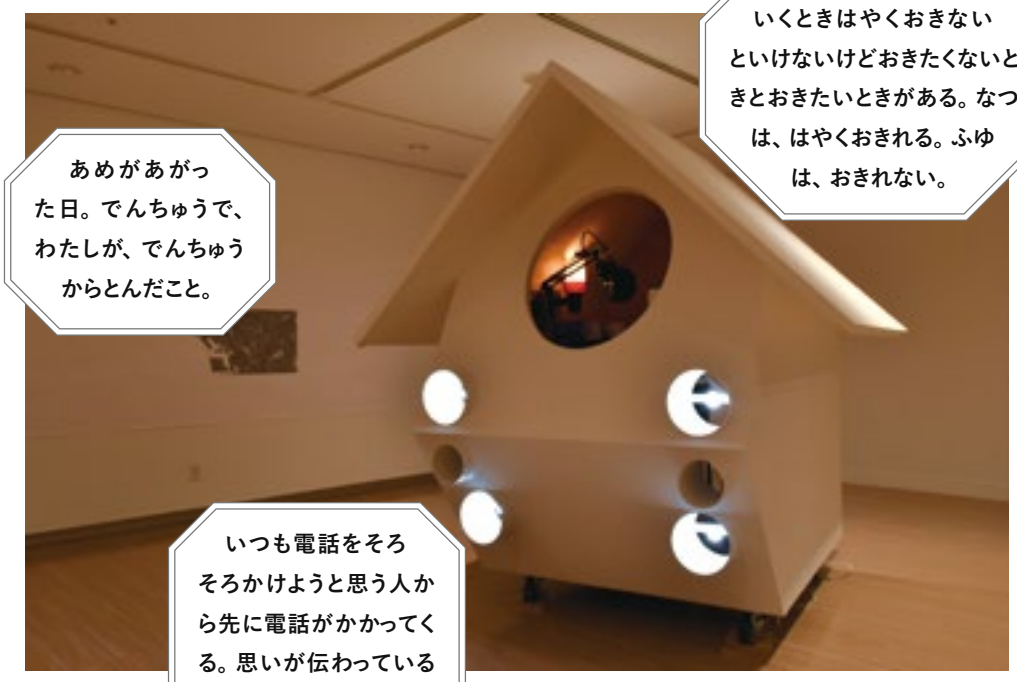
——実際に「宇宙巣箱のSFラジオ局」を作ってみて、なにか感じたことや気づいたことはありますか。

みんな、心のなかにラジオを持っているんだな、と思いました。言葉にはしていないけれど、心はつねになにかを発信していて、その心の声をラジオのように聞いている。また、自分のアニメーション作品の根っこには、「ぼくにはこう見えるけれど、あなたにはどう見えますか」という想いがあるのですが、そういったことを問いかけるような部屋になっていると感じました。

——最後に、集まった「SFなはなし」を読んだ感想をお聞かせください。

「SFなはなし」には、エビデンスがありません。そういう白昼夢のような体験が、みなさんそれぞれにあることを知りました。そして、そのエビデンスのない体験が、どこかのだれかが代読することによって、根拠のない確信を得ていく。「再生」という字は「再び生きる」と書きますが、読み上げることで再生され、体験が再び生きていくことが、とてもおもしろいと感じました。

［話し手：松本力（本展作家）］



あめがあがった日。でんちゅうで、わたしが、でんちゅうからとんだこと。

いえでがっこうにいくときはやくおきないといけないけどおきたくないときとおきたいときがある。なつは、はやくおきれる。ふゆは、おきれない。

いつも電話をそろそろかけようと思う人から先に電話がかかってくる。思いが伝わっているのか不思議に思う。

つくりかけラボ05
松本力｜SF とりはうたう ひみつを
会　期　2021年10月16日（土）〜12月26日（日）
会　場　4階 子どもアトリエ
観覧料　無料

＼次回予告／

2022年1月13日〜4月3日　「つくりかけラボ06　岩沢兄弟｜キメラ遊物園」

オープン間近！ ワークショップの打ち合わせに潜入！

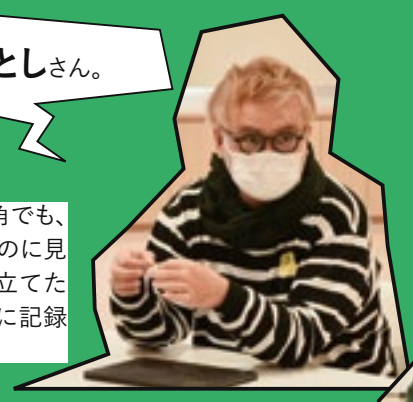
［取材日：2021年11月24日］

次回のつくりかけラボは、千葉を拠点に活動する岩沢兄弟をお招きします。岩沢兄弟は、「モノ・コト・ヒトのおもしろたのしい関係」を合言葉に、人や組織の活動の足場となる拠点づくりを手掛けるクリエイターユニット。ご兄弟で幅広いプロジェクトを担当されています。

今回は、会期中に実施するオープンワークショップの打ち合わせを取材！　オープンワークショップとは、来場者がいつでも参加できる形式のワークショップで、つくりかけラボのひとつの特徴となっています。いったいどんな内容になるのでしょうか……？

「いきもの」や「見立て」といったワードが飛び交っています。どうやら、会場にあるモノに「目」や「しっぽ」をつけて、いきものに見立てるワークショップを考えているよう。

兄の**いわさわひとし**さん。



椅子やテーブルの角でも、目をつけたらいきものに見える、とのこと。見立てたいきものは、カードに記録してもらうそうです。

弟の**いわさわたかし**さん。

集まったいきものは、岩沢兄弟が写真で記録して図鑑を作るかも？　頻繁に会場を訪れる予定とのことで、空間がどう変わっていくか楽しみです。

場所を変えて、長年にわたって美術館に蓄積したモノの数々をご紹介。活用できるものもありそうな……。

最後まで「こういうこともやってみたい」というアイデアは止まらず。おもな内容は決まりましたが、まだまだ発展がありそうです。お楽しみに！

つくりかけラボ06
岩沢兄弟｜キメラ遊物園
会　期　2022年1月13日（木）〜4月3日（日）
会　場　4階 子どもアトリエ
観覧料　無料

美術館の仕事を紹介します！

その14 ワークショップパートナー制度、ご存知ですか？

2020 年 7 月の拡張リニューアルオープンを機に新設されたワークショップパートナー制度。これまで、地域のなかで個々にクリエイティブな活動を行ってきた方に「ワークショップパートナー」として登録してもらい、美術館とタッグを組み、様々なジャンルやアプローチのプログラムを、幅広い年代の人たちに向けて提供していく試みです。昨年度からすでに何人ものパートナーに活躍いただいていますが、あらためてどのような活動を行っているのかご紹介します。

①どんな企画がどれくらい開催されているの？

陶芸、染色、木版画、ダンス、演劇、対話型鑑賞、色彩表現などなど、パートナーそれぞれの専門性や個性が光る多彩なプログラムが行われています。2020 年度は 13 個、2021 年度は 17 個のプログラムが企画され、オンラインも交えながら開催されています。

＊これまで開催されたワークショップの報告は、美術館のブログでご覧いただけます。

②どんな風にタッグを組んでいるの？

パートナーは、これまでの経験や知識を活かしたプログラムを考え、必要な道具や素材などを用意し、当日の進行も行います。美術館は、チラシやホームページを作成して広報をし、参加者を集め、ワークショップの会場も提供します。

③ワークショップパートナーは誰でもなれるの？

条件に合う方*は誰でも応募することができます。1 年ごとの登録制なので、秋から冬に向けて一般公募が行われ、毎年 4 月から新たな顔ぶれで活動をスタートしています。

＊パートナーの募集に関する詳細は、みんなでつくるスタジオのホームページでご確認いただけます。

もしかしたら、ある企画では参加者として場に関わった人が、別の企画では提供者として場に立つこともあるかもしれない。誰もが主役でありつつ、様々な立場で関わることができる。そんなインタラクティブな可能性を持っているのもこの制度の大きな特徴です。
ワークショップを開催する側、参加する側、どちらでも！　気になった企画を見つけたらぜひご参加ください。お待ちしています。

［テキスト：学芸員　田口由佳］

びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー　本をみる、美術をよむ vol.5

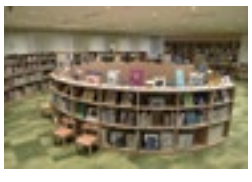
現代作家による選書「あのとき読んだ、あの本が」

10月から12月のあいだ、特別企画として、千葉市美術館にゆかりのある6組の現代作家に選書を依頼し、特集コーナーを作りました。
テーマは、子どものころ～若者のころに読み、いまも影響を受けていると感じる本。今回は、その一部をご紹介します。
コーナーの設置は終了しましたが、ここに挙げた本は、びじゅつライブラリーでお読みいただけます。

選書の全貌は、ホームページでご覧いただけます！

びじゅつライブラリー

「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館 4 階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約 4,500 冊配架しています。
ぜひふらっと遊びにきてください！



© KARAPPO

福田美蘭さんが選んだ本

トーベ・ヤンソン　『ムーミン谷の彗星』

福田さんは、トーベ・ヤンソンが描く挿絵に惹かれたそうです。「今にも何かが起きそうな異世界の雰囲気は、日常を超えたどこかへつながる創造の力の、驚異と魅力を伝えてくれた」と語ります。

吉澤美香さんが選んだ本

ヒュー・ロフティング　「ドリトル先生」シリーズ

「全巻10回ずつは読み返した」という「ドリトル先生」シリーズ。吉澤さんのお気に入りは、『ドリトル先生航海記』と『ドリトル先生月から帰る』だそうです。不朽の名作シリーズを全巻揃えました。

須田悦弘さんが選んだ本

中村昌生　『日本の美術19　茶室と露地』

たくさんのカラー図版を通して、待庵や桂離宮など、日本の著名な茶室や露地（茶室のお庭）を紹介する一冊。須田さんは、この本から、「今につながる価値観や美意識」の影響を受け続けているそうです。

［mé］（南川憲二さん）が選んだ本

日比野克彦　『えのほん』

現代美術作家の日比野克彦さんが手がけたこの絵本には、なんと、落書きをすることができます。「時間を超えて線や形、それを描いた日比野さんの感覚とコミュニケーションできてしまうワクワクする本」です。

志村信裕さんが選んだ本

奈良美智　『NARA NOTE』

アーティスト自身が著した本を選ばれた志村さん。1999年から2000年の日記をまとめたこの本の帯には、「NEVER FORGET YOUR BEGINNER'S SPIRIT!」と書かれています。帯も含めて、絶対に手放せない一冊なのだそうです。

清水裕貴さんが選んだ本

岡崎二郎　『アフターゼロ』

ノストラダムスによって世界が終わると予言されていた1999年までに、清水さんが出会った本。そのうちのひとつ『アフターゼロ』は、「現実社会に科学と空想が溶け込む」SF漫画オムニバスです。